精神分析研究　60 (4) : 560–562, 2016

□書　評

小林隆児著

「あまのじゃくと精神療法――「甘え」理論と関係の病理」

クリニックおぐら　小倉　清

小林隆児氏による今までの10冊をこえる著書のうち，本書はまちがいなくもっとも力の入った秀逸な作品であると，私は思う。もっとも説得力のある自信作であるにちがいない。ずっと以前，どこかで読んだことなのだが「大江健三郎が作家としてすぐれている由縁は，一作毎により高度に進歩していることだ」という。それに似たことが小林氏には通じると思う。小林氏にいわせれば，まだこれから少なくとも２－３冊をものにしなければ，自分が主張したいことは終わらないということだろうが，今回の本書はどの章をみても，氏の本音が十二分に読みとれると思う。ここに集められた10の論文のうち，４つは今までに「精神療法」誌，「精神分析研究」誌，「そだちの科学」誌などに掲載されたものだが，あとの６つは今回，新たに書き下ろされたもので，それぞれに力がこもったものになっている。

まず最初のⅠ）「『甘え』理論にみられるアンビヴァレンス」とⅡ）「『関係』からみた『甘え』理論と精神療法」の２つは合わせて５つの章からなっていて，ここでは土居先生の「甘え」理論とスターンの力動感とが小林氏自身の考察によって改めて見直されている。特に「甘え」とアンビヴァレンスについての考察，「メタファと精神療法」についての考察は自験症例の提示を含めて，微に入り細を穿って丁寧に書き進められている。

更には「『関係』から読み解く土居論文『勘と勘繰りと妄想』」，「『甘え』と力動感」の章では，今は亡き土居先生やスターンがもしこの論文を読んでおられたならどのようなコメントをなされるだろうかと，想像するのも興味深いことだろうと思った。そしてもし小林氏を含めてこのお三人が対談でもされたら，どんなにrichなことになったろうかと思われた。というのも小林氏は「甘え」理論がなぜ誤解されやすいのかについて考察したり，「甘え」理論と力動感とを比較検討したり，スターンが示した事例を「甘え」を通して考察したりしているからである。また「甘え」と原初的コミュニケーションについての考察がここにもある。私としてはⅡ）が大変面白かった。小林氏の特徴がよく表現されていると思うからである。氏が考える精神科臨床，本来の精神科医としてのあり方にも基本的な所がよく示されているとも思った。

しかし著者として，氏が気に入っておられるのはⅢ）「乳幼児期の母子の関係病理――『あまのじゃく』」と，Ⅳ）「『あまのじゃく』と精神療法」の部分ではないかと思われた。著者の長い間の主張である臨床における「関係性」の視点は，それこそ誤解されたり批判されつづけてきたという歴史があるのだから，「ここを先途（crucial moment）と」という思いが強くあるのだろうと思われるからである。「あまのじゃく」は「甘え」から派生する心理を示すものといえるだろうが，しかしそのもともとの出典といえば，これはうんと古く，日本の古事記や神話の世界からなのである。小林氏は「あまのじゃく」は甘えたくても甘えられない時にすねた状態になる，その時の心理であって，その類語として「へそ曲がり」，「つむじ曲がり」，「無い物ねだり」などがあると指摘されている。これは土居先生の「隠れん坊としての精神療法」（メニンガー病院での講演としてなされ，のちには日本語となって発表されている。『「甘え」理論と精神療法』金剛出版，1997，pp.93-99）の中にも，それとしてはっきりとは述べられてはいないものの，精神療法の中で患者自

ら隠れておきながら，治療者に見つけてほしいと願う心理を描いている。更には河合隼雄の「トリックスター」についての解説も，ここで関連事項として取り上げられている。そんなわけで，小林氏は臨床場面で関係病理をより深く理解する上で「あまのじゃく」をとりわけ意味あるものとして注目している。

Ⅳ）の「『あまのじゃく』と精神療法」では「ライフステージからみたアンビヴァレンスの現われ」として神経症の症例提示を8歳から33歳までの12例のケースについて行っている。これは個人情報の扱いについて厳しい時代にあって，なかなかのことだが，注目すべきは患者の言動について触れている部分よりも，むしろ治療者自身の心の動き，迷い，疑問などにより多く触れているという点である。

土居先生は精神療法の中で，患者のアンビヴァレンスをどのように捉えるかは，患者が言語化できないような微妙な所作などに注目すべきだし，治療者自身が十分「甘え」の心理に習熟していること，そして様々な自分自身の「甘え」が見えていなければならない旨を述べているわけで，その実践としてここでの症例提示は独特のものであるといえよう。特に初回面接ではそのことが特に目立って描かれている。もちろんそれが治療的に働いているのはいうまでもない。読者には特にその点について注目して読んでいただきたいと思う。この症例の提示は64頁にも及んでいる。中断したケース，1回のみで終わったケースもあるのだが，それがあるがままに報告されている。そしてそれぞれについて「まとめ」という型で反省が述べられている。与えられた状況，つまり病院なりクリニックにおける避けられない状況がある中で，やむなくごく短時間しか面接できないという条件についても，そのせいで治療に制限があったというような愚痴こぼしや責任のがれを言うようなことにはなっていない。またある考えから神経症圏のケースに限定してとりあげたと述べられているのだが，一般にそう考えられているかもしれないこと，つまり神経症は治りやすく，精神病は治療がなかなかむつかしいとは必ずしもいえないであろう。それは臨床をよく知るものには十分理解できるはずのものである。

それからⅣ）の最後の所，181頁に短いコメントがある。それはアンビヴァレンスというものは一体，いつどこで起こるのかという問題である。これは発達論的視点からすれば，ごく原初段階において，つまり胎児の時期において準備されるものと私は考えたい。今日，超未熟児の臨床において，胎児のことはすべて手に取るようによく分るに至っているのである。それに2－4歳の人々はほとんど100%，胎児のときの様々の体験を語ることができるのである。あるいは極めて重症の精神病状態の人々は，しばしば胎児の時の記憶について語るのである。あるいはそれ以外に何も語るべきものをもたないということがある。そしてその中には原初的なアンビヴァレンスが認められると考えられるのである。

私のクリニックでは若い妊婦，新生児とその母親，そして3歳位までの子どもを対象とした毎日のデイケアを行っている。産科医から産科ではどうにもならないといって紹介されてくる若い妊婦の中には，妊娠そのものについて強いアンビヴァレンスを持っている人がいる。そんな場合，胎児はもう様々の体験をもたざるをえない状況の中にいるのである。そして生まれてきてすぐの赤ちゃんが母親の顔を見ることを拒否し，かつ初乳を飲むことを拒否する。それ程のことが観察されるのである。また原則的にいえばどの年齢の患者についてもいえることなのだが，特に思春期よりも以前の年齢の方の初回面接やごく初期の治療段階では，私は患者やその家族の方に，生まれてすぐから3－4歳までの間に撮った写真のすべてをもってきていただくことにしている。時には200－300枚位にもなろうが，それらを時間をかけてじっくり見て話し合い，そこで様々のことが展開されることになるのである。

Ⅴ）「精神療法における『あまのじゃく』の治療的意義」ではこれまでに述べられてきたことの駄目おしと言ってもいいように思う。そしてⅥ）「精神療法研究の原理を考える」では一転して，非常に哲学的な思考が展開される。自然科学と人間科学は本質的にどのような違いがあるかという問いは，結局の所，それは認識の問題に帰結

するのであろう。そこで議論はどうしても哲学的なそれにならざるをえないのではないか。なかんずく各々の臨床家がもっている人生観，人間観による所が大きいのではなかろうか。

かくして本書は終局的には，人生にかかわるmuteな疑問と対峙することを暗示し，かつ求めていることになるのではないかと思うのである。

（弘文堂，2015年，240頁，3,400円＋税）

（2015年８月５日受理）

■ご　案　内■

アタッチメントと精神病理講習会

このたび，米国にて家族関係研究所（Family Relations Institute ）を主宰する，アタッチメント（愛着）研究者であるPatricia M. Crittenden博士をお招きし，講習会を開催することとなりました。Crittenden博士は，故Ainsworthの下でアタッチメント研究を開始され，最新の認知科学や様々な臨床心理学理論などを取り入れて，「アタッチメントと適応の動的・成熟モデル（Dynamic-Maturational Model of Attachment and Adaptation: DMM)」という統合的人格発達理論を提唱しています。本講習会ではDMMの全体像を学ぶことができます。また，３日間参加者には修了証書を発行します。この修了証書は，AAIなどの上級資格の講習会参加に活用できます。アタッチメントに関心を持つ多くの専門家にご参加いただきたいと思います。

開催日時：平成29年３月29日(水)，30日(木)，31日(金)　10：00-17：00

開催場所：札幌コンベンションセンター　２階小ホール

参加者：心理・医療関連の専門職，もしくは大学院生。先着150名までとします。

資格更新ポイント：臨床心理士資格更新ポイント研修として申請予定（１日参加ごとに２ポイント，全日参加で６ポイント)。

申し込み方法：乳幼児保健学会ホームページ〔http://www.jaih.org/〕上の申し込みフォーム，もしくは，乳幼児保健学会事務局・講習会担当までE-mailにてお申し込み下さい。E-mailでのお申込みの際には，メール本文に氏名・所属・職種・臨床心理士登録番号（有資格者のみ)・連絡先（E-mailアドレス）をお書き下さい。また，参加費は指定口座にお振り込み下さい。お申込み後，振込先をお知らせいたします。なお，振込受領証をもって領収書に代えさせていただきます。

早期申込期限：平成28年12月28日(水)　　参加費　36000円

後期申し込み期限：平成29年３月13日(月)　参加費　40000円

（振り込まれた参加費の払い戻しは致しません。)

主催：乳幼児保健学会　後援：北海道臨床心理士会